

## 篠原助市教育学と朝永三十郎の西洋哲学史研究

木内陽一

はじめに

近代日本の学問的教育学は、一八八七年前後のドイツ・ヘルバルト派教育学の受容を出発点にしている。この理論的立場は、教授法の開発に重点をおいたものであり、当時の教育政策の課題であった初等教育の普及のための理論的基礎を提供することを課題としていた。事実、一九一一年には就学率は九八パーセントに達し、この国家的課題は一応達成された。

明治末年からは、一方で、大正期新教育と言われる公教育の定型を打ち破るような、教育実践の試みが新たに始まるとともに、他方、それと呼応して、単に教授法に限定されない、教育という営為の哲学的省察、そしてその要求に応える学問的教育学体系化の努力がなされるようになった。本発表で取り上げた篠原助市

(一八七六一—一九五七年)が教育哲学者として注目を集めたのは、こうした時期であった。

篠原助市は体系的な教育学の構築を自己の畢生の課題とした教育学者として、現在でも注目に値する。最初の著作『批判的教育学の問題』(一九二三年)は、単なる西洋教育学説の紹介や移入を越えて、「日本人によって著された最初の、やや独創的な教育哲学的著作」(梅根悟)として、西田幾多郎の『善の研究』に比せられることがある。篠原の一連の著作、『理論的教育学』(一九二九年)、『教育の本質と教育学』(一九三〇年)、『教授原論』(一九四二年)〔そして戦後になって漸く完成された『訓練原論』(一九五〇年)〕等は戦前の日本の教育学のひとつの水準を示すものである。そして篠原は戦前の教育学研究のひとつの牙城であった東京文理科大学の教育学教授として、多くの教育研究者を薫陶した。

以下の本発表では、外国（とくにドイツ）教育学の移入がアカデミズム教育学の大勢であった戦前期に、篠原助市が例外的に「やや独創的」な教育学を構築しえた理由を、篠原の学的成長過程を検討することを通して考えてみたい。その際、とくに篠原の京都帝国大学時代の師であった哲学史家、朝永三十郎（一八七一—一八五一年、明治四—昭和二六年）の影響に焦点を当てたい。

本稿では以下のようにして、この課題を遂行したい。まず、明治末年、大正期の篠原と朝永の出会いと影響関係を瞥見する（一）。そして大正期の篠原に対す朝永の影響をやや詳細に検討する（二）。最後に、篠原の学位論文『教育の本質と教育学』を手掛かりに篠原教育学の概要を示し、篠原教育学全体に対する朝永の影響の意味について考えたい（三）。

#### 一 篠原助市の学的成長と朝永三十郎

京都帝国大学文科大学で西田幾多郎の同僚であった朝永三十郎は、近代日本の思想史で独自の位置を占める優れた哲学者であった。独自の哲学体系の樹立を目指した西田の学的堂為と比べると、朝永の哲学研究の特質は、厳密な文献研究に基づくアカデミックな哲学史研究を推し進め、近代精神の形成過程を究明した点に求めることができる。

明治末年の朝永の学的発展を要約的に述べれば、パウルゼンの著作に大幅に依拠した『哲学綱要』（一九〇二年一月）から、『哲

学辞典』（一九〇四年二月）の編纂を梶子に、研究の視野を大幅に広げ、『哲学と人生』（一九〇七年二月）、ドイツ留学以前の研究の総決算として、『人格の哲学と超人格の哲学』（一九〇九年九月）を出版している。朝永は最初の著作（『哲学綱要』）以来、一九一〇年前後の思想的課題に誠実に対応し、「人格本位の実践主義」を探求することによって、人生や自我の問題に取り組んだ。

ところで朝永は東京帝国大学卒業の後、一九〇一年より東京高等師範学校で哲学を講じている。愛媛県生まれの篠原助市は一九〇二年同校入学、一九〇五年卒業の後、一九〇六年には一年制の研究科を修了している。篠原と朝永の出会いには、一九〇四年篠原が東京高等師範学校本科英語部三年次一・二学期に聴講した朝永の担当する「哲学概論」であったはずである。篠原の述懐によれば、高等師範三年次の朝永の「哲学概論」講義は、『哲学綱要』を基礎としたものであったという。すでに述べたように、本書はパウルゼンの叙述に依拠したものであり、朝永独自の論とは言えないまでも、当時の時代的課題に應える内容をもっていた。篠原の在籍した高等師範学校英語部のカリキュラムでは、哲学関係は「哲学概論」のみであり、初学者としての篠原の哲学理解は、朝永の「哲学概論」講義に出発点において強く規定されていると思われる。朝永の講義によって篠原が哲学の世界に導かれたことは大きな意味をもつ。さらにこの時点での朝永との出会いは以下の点で注目される。

篠原の履修した「哲学概論」が終わった時点（一九〇四年一月）で朝永は『哲学辞典』を出版した。後年、篠原は同じ出版社から『教育辞典』編纂の依頼を受け、一九二二年に出版している。篠原の辞典編纂において、朝永の推挙があった可能性がある。仮にそうでなくても、篠原は朝永の『哲学辞典』を念頭においていたであろう。西洋哲学の原典を正確に読み解き、着実な学問的な方法を重視する態度、辞書編纂という作業を基盤にして、自己の学問を積み上げて行こうとする指向は両者に共通している。

篠原は本科卒業の後、一年制の研究科に籍を置き、朝永より哲学史の講義を受けている。修了前に研究の方向について朝永に相談をしたり、修了後に赴任した福井県師範学校に朝永を講演のために招いている。さらに朝永は一九〇九年一月六日英独仏に留学の途につくが、留学中にも文通があり、研究テーマの相談をしている（篠原一九八七年、四三三頁）。

一九〇六年四月、福井県師範学校教諭となった篠原は、附属小学校の主事を兼任し、まず当時欧米で注目を浴びていた心理学的な手法に基づく児童研究に着手した。しかし哲学志向の強い篠原は、一九一〇年以降、こうした実証的研究からしだいに遠ざかる。そしてケストナーの著書（Kastner, 1907）を手掛かりに、ルドルフ・オイケンの新理想主義の下に成立した人格的教育学に注意を向ける。同時に当時の欧米の教育学の動向を幅広く視野におさめようと努力していく。ドイツではナトルプ等の新カント派教育

学が教育学の主流になりつつあり、ドイツ教育学を理解するためにも、さらに深い哲学上の知識が必要であった。

## 二 「自然の理性化」という篠原の教育理解

——篠原における新カント派哲学受容

一九一三年一月、朝永は二年間の欧州留学より帰国し、京都帝大文科大教授となり、哲学・哲学史第四（西洋哲学史）講座を担当する（当時、朝永は四十三歳）。晩学の篠原助市（当時三十八歳）が朝永の門を叩いたのはこの年であった。朝永三十郎の哲学史研究上の名著『近世における我的自覚史』が出版されたのは、三年後の一九一五年一月である。このように考えると、篠原の京都帝大在学中に『我的自覚史』は執筆されたことになる。

本書（『我的自覚史』）において、朝永の学的営為の最初期から中心にあった人格的要求は、主としてヴィンデルバント的な新カント派哲学の影響の下に、さらに学問的に発展させられている。つまり、朝永が西洋近世思想の精華と考える理性的我的自律という問題を、当時としては類を見ない徹底さで精神的に追究しているのである。とくに朝永はヴィンデルバントに言及する際、その中心思想が自然と理想との関係をいかに見たか、生に対する理想の意義をいかに考えたか、という点に注目している。また同年に出版された『独逸思想とその背景』も見逃せない。この書は、ドイツ神秘主義まで視野に入れ、ドイツ観念論哲学の「理性」概念を

検討した労作であり、『我の自覚史』と密接な関連をなすものである。

朝永の営為に見られるように、日本の哲学研究は、西洋哲学の専門的・学術的な受容態勢を整えつつ、自我の究極的根拠の探索とその確立という、当時の知識層の人生観的、世界観的要求に込める思想史的な意義を有していた。篠原は活動のひとつの頂点にあった朝永を含めて、独自の学風をもちつつあった京都帝国大学文科大学の諸教官のもとで学生生活を送ったわけである。篠原が自伝で述べるところによれば、京都帝大入学後、さまざまな講義を聴講しながら、特にカントに注意を払って研究していたようである。

一九一六年、京都帝国大学を卒業した篠原は、大学院に入学し副手となる。この頃の篠原の研究動向を知る資料は少ないが、論文『青年と自覚』（篠原、一九一七）では、自我に目覚める唯一の途は、「批評的態度」にあると述べている。篠原によれば、人間の心は表層の「ある」の層と深層の「べし」の層からなっており、批評的態度をもって、真の自我を自己の内部に自覚することが「人生の本務」だというのである。この「批評的」という表現は、カントの批判哲学を念頭においていると思われる。つまり自我に関する関心とカント哲学への関心が表裏一体となっているのである。

その一年後（一九一七年）、篠原は二本の学術論文を公表するこ

とによって、教育哲学者として学界に登場する。その論文は「デューイの教育論」と「最近の教育理想」である。これらの論文は、京都帝大入学以来の篠原の研鑽の成果を書き記したものであるばかりでなく、篠原の教育学の基本的立場がすでに確立していることがうかがえる。両論文に共通する篠原の立場は、近代思潮の特徴を「我の自覚」にみることに、教育を「自然的自我」を克服し「理性的自我」を実現することとらえていることである。

篠原が啓蒙思潮をデカルトからカントへの流れととらえることも、一九一八年以降、デカルトとカントの研究に力を注いだ朝永の問題意識と重なりあう。こうした自我のありかたを精神的に問う篠原は、明らかに朝永の影響下にあるといえよう。

さて「デューイの教育論」が発表された『哲学研究』（京都帝国大学文科大学哲学会）は一九一六年創刊され、哲学研究者のひとつの登竜門と目される専門学術雑誌であった。篠原の教育哲学者としてのデビュー作は、当時の新しいアメリカ教育学に対する、篠原が理解し得たカント的立場からの批判的考究であった。篠原によれば、デューイの立場は徹頭徹尾「生物学的見方」に立つものであって、児童の本性を「感覺的―運動的」にとらえ、しかも学習の動機を「実用」に見ていると断ずる（篠原一九二二年a、三八五頁以下）。このように「個人」を単に経験の世界でとらえているために、「純粹自我の活動」（篠原一九二三年、三七六頁）は等閑に付される。しかも教育行為を導く規範を解明することができない

いのであるから、デューイの立場からは「理想の学」としての教育学は構築できないと結論づける。

同様のデューイ批判を含みながらも、篠原の立場を明らかにしたものが「現代の教育理想」である。この論文は教育理想をテーマとしているものの、その内実は同時代の教育学の諸潮流を鳥瞰しつつ、自己の立場を明らかにすることであった。取り上げられている教育学的立場は、エレン・ケイの自由教育説、パウエル・ベルゲマンの生物学的教育学、ジョン・デューイの社会的教育学、エルンスト・リンデの人格的教育学、パウエル・ナトルプの社会的教育学である。自由教育説（ケイ）も生物学的教育学（ベルゲマン）も経験的自然的的自我にとどまっておき、真の自我は一層深いところに存すると篠原は言う。結論的には、「理性的自我の真自覚の上に教育の理想を安定した」（篠原一九二二年<sup>a</sup>、三九頁）パウエル・ナトルプの教育学を高く評価している。

ところでマールブルク大学の新カント派哲学者・教育学者パウエル・ナトルプの『社会的教育学』（一八九九年）は、すでに二〇世紀初頭に紹介された（大隈一九〇二年）。しかしこの著作の中心は、サブタイトルに「社会の基礎に立つ意志教育の理論」とあるように、それまで比較的等閑視された教育と社会の関係を新カント派の立場から明らかにすることにあり、自我の問題を説明することではなかった。篠原はナトルプの検討というかたちで論を進めてはいるものの、「自然」と「理性」という二分法は直接的にはナ

トルプではなく、朝永やヴィンデルバントに負っている。論文「現代の教育理想」を執筆後、一九二一年前後から本格化したと見られる篠原のナトルプとの取り組みは、朝永の影響下であらかじめ形成されていた、このような「場」の中でなされているといえよう。

篠原は上述の教育理解を「自然の理性化」と定式化し、大正期の教育界で一世を風靡した。この篠原の教育観が日本の教育哲学の「やや独創的」な成果のひとつであったが、それは朝永の哲学史研究に多くを負うものであった。

### 三 一九三〇年代における

#### 篠原教育学の体系化

大正期の篠原の関心事は、内面的な自覚に基づく理想的な自我の確立を教育理論の根本に据えることであった。こうした見方は、与えられた伝統的な秩序から自らを解き放ち、一個の主体として個人を確立することを意味していた。このような理論は大正期自由教育の担い手であった都市中間層の教育要求に合致するものであった。しかし当時ドイツの新教育思潮として受容された新カント派のパウエル・ナトルプの教育学、とくに彼の社会的教育学の「社会」理解が実は極めて観念的抽象的な理解にとどまり、社会制度としての学校や教育、そして社会的存在としての人間を説き明かしてはいない、という批判はすでに大正末期から現れていた。

確かに、篠原においても個人と社会の関係について、ナトルプを引き合いに出しながら言及されていた。すなわち篠原によれば、第一に、他人との意識関係を離れて自己意識はない、ゆえに社会と個人は連続的にとらえるものであるとされる。第二に、社会も個人も無限に発展し、究極的には統一されていく、というのである。しかしこうした抽象的で素朴な理解では、一九三〇年前後の日本の現実に対応できなかった。教育学の発展も、社会存在の論理、すなわち人類全体と個人との間に立つ民族社会の論理へと目を向けた一九三〇年前後の日本の思想界の変貌と軌を一にしていた。

朝永は一九三二年（昭和六年）京都帝国大学を定年退官する。朝永はすでに時代精神の変貌を追う年齢は過ぎていたし、哲学史家として歴史的な研究対象に限定して自己の歩みを進めていった。これに対して篠原は、一九三〇年、自己の教育学体系の見取り図ともいえる学位論文『教育の本質と教育学』を出版する。同年、篠原は東京文理科大学教授に就任する。さらに一九三四年からは文部省調査部長を兼ね、一九四一年に施行された国民学校令の理論的基盤を提示した。

篠原は初期の論文（『現代の教育理想』）において、教育学の学問的構造について、教育学は「一般的教育学」と「特殊的教育学」の二領域から成り立つと述べていた。篠原によれば、教育一般の形式的目的は理性の哲学がこれを与え、特殊な具体的目的は

歴史研究とあいまって決定されるとされた（篠原一九三二年a、四八頁）。『教育の本質と教育学』の課題は、一方で教育概念を厳密に規定するとともに、他方、すでに示唆されていた自己の教育学体系の二領域を、「理論的教育学」と「実際的教育学」として方法的に練り上げることだった。

『理論的教育学』は教育の理念を検討する領域である。この時点でも篠原は「自然の理性化」という教育理解を引き継いでいる。教育を定義するに当たって、より具体的に、教育者の意図的行為と被教育者の発達という相互主体的な側面から教育を考えている。とくに注目すべきは、篠原における発達の規定である。篠原によれば、教育学という発達は、単に生物学的なレベルにとどまらない。生物学的な発達は、機械的であり自然必然的である（篠原一九三〇年、二二頁以下）。これに対して教育学的な発達理解は、価値の実現であり、「最高普通の純粹自我を内に実現すること、自己の最高本質に帰ることによって、人は始めて人となる」（篠原一九三〇年、四二頁以下）篠原の表現でいえば、「自然的な経験自我」のなかに「純粹自我」「理想的自我」を顕現させることである。（篠原一九三〇年、五五頁）このように篠原にあっては、教育は人間のもっている生物的側面を考慮しながらも、教育学の観点からみた発達は徹頭徹尾、価値的な現象ととらえられる。

しかし実際の教育が、歴史的民族的性格を有することを篠原も認める。篠原のいう「実際的教育学」は、「自然の理性化」とい

う理念が、教育という歴史的、社会的営み中でどのように実現されるのかを示すものである。篠原はこの課題に因應するために、個人と社会の関係について論を進める。ここでも篠原にとって重要なのは個人の「自覚」ということであるが、可能体としての個性が、社会的関係に入り、社会との対立によって自己に帰り、自覚に高まるとする(篠原一九三〇年、九二頁)。他の箇所では個性と社会の対立は、人格発達の根本条件であると言う(篠原一九三〇年、九二頁)。したがって、教育とは社会と個人との弁証的対立を通して、自然の理性化としての弁証的發展に導く作用であると言いつている(篠原一九三〇年、九五頁以下)。しかしこの時点では、社会については未だ抽象的な論に終始し十分に考えられているとはいえない。

一九三〇年以降の篠原の課題は、「實際的教育学」を体系化することだった。篠原はこの課題に因應するために、新カント派とは異なる、ディルタイの生の哲学の流れを汲む精神科学的教育学を視野に入れていく。しかしその場合でも、「教育の本質は自然の理性化である」という主張は理念として、篠原は終生持ち続けたのであった。

### おわりに

哲学と同様に、教育学もまた時代の課題に因應しようとする実践の学として成立した。教育学者、篠原助市が学的成長を遂げた明

治末年、大正期の思想的課題は、西洋文化の影響下で新たな自我の可能性を探ることであった。篠原がそうした自我探索の最先端であった京都帝大の哲学科に入学したことは、篠原の学的成長を決定的に規定した。朝永のもとで西洋哲学史を専攻したことは、朝永が優れたかたちで提示した西洋の私の精神史を直接学び、教育学の基礎に据えることを可能にした。さらに朝永の学風である、着実な文献研究の方法を身につけることができたことも見逃せない。一九三〇年以降、篠原は教育の社会的次元を視野に入れる教育理論を目指してさらに研鑽を積んだが、教育を価値的な視点から見ると見る視座を持ち続けた。結論的に述べれば、朝永三十郎の学統は、篠原助市を介して厳格な正統的学問研究の方法として、近代日本の学問的教育学形成の基盤を築いたといえる。

Kaestner, O.(1907): Sozialpädagogik und Neudealismus. Leipzig (Verlag von Roth & Schunke).

ナトルプ(一九七三年)：社会的教育学(篠原陽二訳、玉川大学出版部)。

大瀬甚太郎(一九〇二年)：ナトルプ氏社会的教育学(育成会)。

篠原助市(一九一七年)：青年と自覚(福井県師範学校校友会、啓成詞林、第八号、二六一―三五頁)。

篠原助市(一九二二年a)：批判的教育学の問題(宝文館、使用したの、第四版)。

篠原助市(一九二二年b)：最近的教育理想(篠原一九二二年所収)。

篠原助市(一九二二年c)：ヂューイの教育論(篠原一九二二年所収)。

篠原助市（一九三〇年）.. 教育の本質と教育学（教育研究会）。

篠原助市（一九八七年）.. 教育生活五十年（大空社、一九五六年出版の初版のリプリント）。

朝永先生の思い出編集会（一九五七年）.. 朝永先生の思い出（玉川大学）。

朝永三十郎（一九六六年）.. 近世における「我」の自覚史（角川書店、角川文庫）。

東京高等師範学校（一九二一年 a）.. 東京高等師範学校要覧。  
東京高等師範学校（一九二一年 b）.. 東京高等師範学校沿革略志。

宮川透・荒川幾男（一九七六年）.. 日本近代哲学史（有斐閣）。  
（きこうち・よういち、教育哲学、鳴門教育大学教授）